

## 鳥取・湖を強引に汽水化 希少種も危機に

鳥取県と鳥取市は水質改善、アオコやヒシの発生を抑えることを目的として昨年3月から鳥取市湖山（こやま）池（面積688ha）の汽水化事業を実施している。これは下流の湖山川水門を開放し、湖内の塩分を海水の20分の1以下（この湖の本来の塩分）から最大4分の1まで引き上げるといふものである。その結果、湖山池の塩分は同年の夏には海水の3分の1にも達して生態系が激変し、多くの動植物が死滅している。

深刻なのは、レッドリスト掲載4種を含むイシガイ類の全滅である。うち、カラスガイは、鳥取県の特定希少野生動植物の指定種で、ここが県内唯一の生息地だった。市内の2カ所で残存個体が見つかったが、繁殖の形跡はなく、地方自治体の事業で地元の生物を絶滅させた全国初の事例になる恐れが高い。

植物ではヒシやヒメガマが消失し、ヨシ原も後退した。豊富にいたトンボ類やカイツブリも姿を消した。今年5月以降、塩分を嫌ったコイやフナが流入河川に過密に湖上し、酸欠などで大量死する事態も頻発している。塩分躍層（塩分が垂直方向に急激に変化する層）の発達で貧酸素化し、7月9日には湖内と湖山川でコノシロやボラが未

曾有の規模で大量に死んだ。

水門を開放すれば本来の塩分に戻りそうだが、そうならないのは、千代（せんだい）川下流に注いでいた湖山川が河口付け替え工事で1983年に港に直結したためである。以後、湖山池への高い塩分の流入を阻止していたのが1963年に完成していた湖山川水門だった。今回の事業についての県のパンフレットの「汽水域再生」という文言がこの誤解を助長している。

この事業で県は、アセスメントも地元の生物の専門家への意見聴取もしていない。今年2月には鳥取県生物学会など12団体が共同で事業見直しの要望書を鳥取県知事に提出したが、いまだ無回答である。淡水性の動植物に特徴があり、鳥取県の生物多様性ホットスポットのひとつでもあったはずの湖山池の生物多様性は重大な危機にさらされている。（鶴崎展巨／鳥取大学地域学部教授）



2013年7月9日に起こった湖山池での魚類の大量死。水面に浮かんでいるのは大半がコノシロ。直接の死因は貧酸素だが、その背景に海水導入の影響があることは間違いない。



湖山川が千代川下流部に注いでいたときは、千代川上流から流れ込む水量で、満潮時も非常に薄まった汽水しか逆流しなかった。

ヨーロッパフジツボ。このフジツボの外來種が2012年夏に出現し、湖山池の岸を埋め尽くした。

